

『建礼門院右京大夫集』の成立過程についての一考察

— 尊敬表現語の使用法を契機として —

中 筋 知 美

(一) はじめに

本論文で取り上げようとする『建礼門院右京大夫集』が完成体として成立をみたのは、一応は一二三〇年代前半であろうという説に固定している。その根拠は、そもそもこの私家集は『新勅撰和歌集』選定の資料として、選者である藤原定家の要請に応じてまとめられたものであり、定家が『新勅撰和歌集』の選定を開始したのは一二三三年であるということが、その著作『明月記』に明記されているためである。しかしながら、『建礼門院右京大夫集』（以下、『右京大夫集』と略称する）の成立過程に関しては、諸学者による様々な見解が錯綜し、いまだ確定できるような論証は出されていない。代表的な見解は四説に分類される。

一括成立説

①晩年、建保年間（一二二二—一八）の一時期に、一度に全体がまとめられた。
(佐佐木信綱、富倉徳次郎)

二期成立説

②七夕歌群までが文治四、五（一一八八、九）年ごろまとめられ、建保年間に再度宮仕えの記事が追記された。(本位田重美)
③上巻（高倉上皇崩御を悼む二〇三番歌まで）と下巻（寿永、元暦の）以下）の間に擲筆があり、上巻は高倉上皇の崩御（養和元（一一八一）年）を動機として執筆された。(信太周)

④上巻途中の題詠歌群のあと、上巻と下巻の間、七夕歌群のあとの三箇所区切り、上巻成立は文治四、五（一一八八、九）年、下巻成立はそれよりやや下った時期である。(井狩正司)
二期成立説は、いずれも上巻は文治四、五（一一八八、九）年には成立していたとしているが、私は本論文において、その説を否定する論拠を述べようと思う。私の立場をまずここで明らかにしておこうと思うが、ほぼ一括成立説の立場に立ち、成立時期は建保年間（一二二二—一八）後半か、おそらくはそれよりもっと遅い時期であると考ええる。

前述の四説はすべて建保年間には完全に完成をみていたとしているのだが、おそらくは前半、後半ともに書かれたのは建保年間

後半かもう少し後、一二三〇年代ごろの、右京大夫という女性の青春の日々から、はるかに遠く隔たった時期ではなかったろうか。

(二) 尊敬語使用実態の不可解さ

右の論拠として私が注目してみたのが、『右京大夫集』における尊敬表現語の使用方法の特異性である。

『右京大夫集』という、この私家集というよりは日記文学といった方がふさわしい作品を読んで行くにあたり気付くのは、その尊敬表現語の異様なまでの少なさであろう。

その中でも私が注目したのが、藤原実宗、藤原隆房という二人の貴族に対する右京大夫の叙述態度である。二人ながら作品のごく早い段階において登場し、終章に近い再出仕の部分においてもその消息が記される、いわば右京大夫の生涯を通じての知己であったのだが、上巻の始めあたりに早々と登場するこの二人についての叙述を行うにあたって、右京大夫はほとんど尊敬語らしい尊敬語を使ってはいないのである。

○「おなじ人（実宗）の、四月みあれのころ、藤壺に参りて物語せしをり、権亮維盛のとほりしをよびとめて、『このほどに、いづくにてまれ、心とけてあそばんと思ふをかならず申さん。』などいひ契りて……」（後略）

（『建礼門院右京大夫集』六番歌詞書）
実宗の行為を示す動詞は「参りて」「物語せし」「よびとめて」「いひ契りて」の四つであるが、そのすべてにおいて尊敬表現は

使われていない。

○「少将（隆房）かたはらいたきまで詠じずむじて、硯を乞ひて『この座なる人々何ともみな書け。』とて我が扇に書く。」

（同右、九五番歌詞書）

○「隆房の中納言の、嘆くことありてこもりゐたるもとへ、こればかりは昔のこともおのずから言ひなどする人なれば、とぶらひ申すとて、」

（同右、三三〇番歌詞書）

隆房に到つては、登場は三ヶ所であるが、そのいずれの部分においても尊敬語に類するものが一切使われてはいないのである。実宗と隆房、二人が右京大夫にとって特に親しい間柄であったためという理由も考えられるが、たとえ親密な間柄であったとしても、名家、西園寺家の嫡子として正二位内大臣にまで昇つた実宗、平清盛の女婿として平家政権当時はかなりの権勢を持ち、平家滅亡後も少々沈潜しつつも正三位権大納言にまで至つた隆房など、いつてみれば最高級の貴族である彼らに対する態度としては、この尊敬語の少なさは非常に不自然だと言つてよい。

藤原隆房は、『右京大夫集』とほぼ同時代に成立した『古今著聞集』にも数回登場するのだが、『右京大夫集』との比較材料としてそこに描かれる隆房への尊敬語表現を見てみたい。

「前略」すなわち参りてひそかにこの様を語り申しければ、大理（隆房）聞き驚かれて、家じゅうをけんせきせられけれども、更にあやしきことなかりけり。（中略）大理、大いにあさみて即ち官人におはせて、白昼に禁獄せられける。」

（『古今著聞集』巻第二 偷盜第十九）

「せられける」「おほせて」など、ここでは隆房の行為に対してほとんどすべてにおいて尊敬語が使用されている。

藤原隆房は清盛女を妻に持ち、摂関家の嫡流である基通とは母親が姉妹という従兄弟の關係になる。平家の公達とともに、平家全盛の時代には最も時めいていた人物であった。

以上、実宗、隆房兩人に対して非常識を覚えさせるほどに尊敬表現を用いてはいないという事実は何を示すのであろうか。

このことから導き出せると思われる仮定が、『右京大夫集』は、再出仕の記事はもちろんのこととして、前半部七夕歌群までの部分もまた、実宗と隆房、兩人の没後に執筆されたのではないということである。

再出仕の部分には実宗の死を示す記事がある。

「大宮の入道内大臣失せられたりしころ、公経の中納言（実宗息）かきこもりて五節などにも参られざりしに……」（後略）
（三三三番歌詞書）

実宗の死亡は建暦二（一二二二）年二月のことであったが、この記事で用いられている尊敬語も、敬意の比較的軽い「られ」にすぎない。隆房の死は『右京大夫集』には記事はないが、承元三（一二〇九）年であることが明らかとなっている。

実宗、隆房兩人は高級貴族であった以上、一介の後宮女房にすぎなかったと察せられる右京大夫は（右京大夫の女房としての地位については後の項目で詳しく検証する）、彼らの生存時には、彼らに對して口を利く際、また彼らについて叙述する際にも、かなり高等な尊敬表現を用いる必要性があったのではあるまいか。

前掲の②④までの説によると、上巻部、あるいは七夕歌群までの部分は文治四、五年ごろまでには完全に執筆され終わっていたということになるが、以上のような尊敬語の使用法から考えた仮定が正しいのならば、それはあり得ないのではないか。

文治年間には、実宗、隆房兩人ともに生存しているのは勿論のこと、宮廷の中においてかなりの高官に昇り、宮廷の重鎮となっていた時期であった。文治年間を含む二人の官職の推移を次に挙げる。

実宗……登場時は頭中将（嘉応二、安元三年）、寿永二年、從三位參議。文治四年、權中納言正二位。建久三年大納言正二位。元久三年内大臣正二位となり、大宮内大臣と称する。建暦二（一二二二）年没。

隆房……登場時は右少将（永万二年、治承三年）。文治四年左兵衛督從三位。文治五年には正三位に。建仁元年（一二二〇）年中納言正二位。元久元（一二〇四）年權大納言。承元三（一二〇九）年没。（以上、『公卿補任』による）
右に示されたように、文治年間といえは、実宗は權中納言正二位、隆房はやや沈潜していた時期とはいえ正三位の地位についており、「殿上人」といった軽々しい地位ではなく、歴とした公卿の一員である。そのような人物を描写するにあたり、中臈女房にすぎない右京大夫がこれほどまでに尊敬語を使わないという事実はありえないのではないか。

そうすると、上巻部が執筆されたのは、実宗、隆房兩人が没してしばらくの時間が過ぎ、兩人に親しく関わった人々もほとんど

死没し去つたのちのことではなかつたらうか。その時点にして、
ようやく嚴重なる尊敬表現を用いる必要性もなくなり、気軽な叙述態度を持つて、みずからの私家集の登場人物たちを描くことが可能となつたのではなからうか。

以上のような考えから、私は『右京大夫集』が執筆された時期は、上巻、下巻共に、早くとも建保年間（一二二三—一八）後半、おそらくそれより多少後であつたと考える。

このように、作品中に使用される尊敬語表現を契機としてその成立過程を考証してゆくことの有効性を考えるために、まずは同時代の物語、日記文学などの作品との比較を通して、『右京大夫集』の尊敬語使用の特異性を再確認しておく。

（三）他作品との比較

尊敬表現の比較の一例として、まずは『平家物語』を取り上げる。『平家物語』は『右京大夫集』と同じく鎌倉前期にその原型が形成されたとみられ、描かれている時代も、登場する人物も、両作品にはかなりの共通点が見られるため、比較材料としては適している。比較の方法に問題がないわけではないが、それは後述したい。

○「経正の朝臣、『うれしくも今宵の友の数に入りて 偲ばれしのおつまとるべき』と申ししを、（中略）この人々の笑われしかば、『いつかはさは申したる。』と陳ぜしもおかしかりき。」
〔建礼門院右京大夫集〕九七番歌詞書

○「常住の僧ども『聞こゆる御事なり』とて、御琵琶を参らせ

たれば、経正これを弾き給ふに……」

〔平家物語〕巻第五 竹生島詣

両作品に共通する経正に着目して見て行くとかかりやすい。見てのとおり、『右京大夫集』においては経正の行為を表す動詞「申しし」「陳ぜし」いずれも尊敬表現は全く使われない。それどころか宴の席で人々に笑われるという滑稽な姿で描かれる。

一方、『平家物語』においては、まず「僧ども」と経正以外の人物を低めておくという念の入れようを始めとして、「御事」「御琵琶」「まいらせ」「弾き給ふ」など、若手の公達に対するには仰々しいほどの尊敬表現語を用いて嚴重に飾り立てられているのである。

『右京大夫集』においても無論、尊敬語の使用例は見られるが、それらのほとんどが天皇、中宮などの皇族や、最上級の貴族たちに対するものである。以下にその分類を示す。

○「給ふ」「せ給ふ」など、最高敬語……天皇、中宮、女院ら皇族たち。近衛殿（藤原基通）、平重盛、宗盛、大納言殿（上臈女房）

○「る」「らる」などの軽い敬語……前者以外のほとんどの人物。主に藤原氏、平家の若手の公達。

○尊敬表現が一例もない……藤原隆房、隆信、平時忠、平親宗、親長。

『平家物語』との比較という方法に問題がないわけではない。敬語表現とは、単に文章表現上の問題というわけではなく、語り手、つまり執筆者の社会的立場が大きく関わりを持つてくる。

「物語」とは、登場する人物たちに直接的な関わりのない作者が、第三者の視点において虚構を交えて作り上げることが可能な世界であるが、反面『右京大夫集』のような自照文学の体裁のものは、作者自らが実際に関わった人物を、自らの身分、社会的立場に応じて描いたものである。それぞれの特質に即して見れば、尊敬語の使い方に差異があることは当然である。私家集、日記文学とは右京大夫が序文において述べているとおり、「我が目ひとつに見んとて」書き記すものであり、そうした性質上、敬語表現はさほど厳密に使用される必要はなかったのだという見方もある。

そうすると、この「尊敬表現語の少なさ」という特徴は、他の自照文学においても見られる性格なのであろうか。それが『右京大夫集』独自の性格であることを証明するためには、他の自照文学作品との比較が必須となる。少々時代は遡ってしまいが、『枕草子』『紫式部日記』における貴族たちとの応酬場面を例にあげてみる。

『枕草子』

○「頭中将齊信の君の、『月秋と期して、身いづくか』ということをうちいだし給へりし、はたいみじうめでたし。いかでさは思ひ出で給ひけん。」

(第二三五段)

○「頭の弁の、職にまゐり給ひて物語などし給ひしに、夜いたうふけぬ。【あす物忌みにこもるべければ、丑になりなば悪しかりなん。】とて参り給ひぬ。」

(第三六六段)

『紫式部日記』

○「頭中将よりさだ、(中略)帰るほど、のぼるまじければ立ちながら、平らかにおはします御ありさま奏せさせ給ふ。」

『枕草子』を比較対象として使用する理由であるが、筆者である清少納言と右京大夫、二人の社会的身分、宮中での女房としての地位がかなり類似していると思われる⁽⁶⁾、おのおのの作品の中の尊敬語の使われ方にも類似性があると思われるためである。

しかしながら、前掲の『枕草子』『紫式部日記』の例文を参照すると、私家集と随筆・日記文学という違いはあっても、ほぼ同様のジャンルに属するといつてよい作品であるというのに『右京大夫集』における尊敬語の使われ方とはかなりの違いがあることがわかる。『右京大夫集』においても「頭中将」の身分を持つ人物が登場する場面がある。彼を描写するうえでの右京大夫の態度を見てゆくことで、より明確な差異が見えてくることと思う。

○「頭中将実宗の、つねに中宮の御方へ参りて琵琶弾き、歌うたい遊びて、ときどき【琴弾け。】など言はれしを【ことごましにこそ】とのみ申して過ぎしに、あるをり、文のやうにてただかく書いておこせられたり。」

(建礼門院右京大夫集 四番歌詞書)

頭中将藤原実宗の行動として六つの動詞が使用されている例であるが、その中で尊敬表現語はというと「言はれし」「おこせられたり」のただ二つのみである。

清少納言や紫式部と右京大夫、彼女らの宮廷女房としての地位は、父の官位からみて、同じようなものであったことは疑いなし

い。しかしながら、宮廷内で交流のあった貴族たちに対する尊敬表現の使い方には大きな違いが見出せる。「枕草子」「紫式部日記」において使われているのは「給ひし」「給へる」など、かなり高位の人物に用いられる改まった尊敬語だが、一方の「右京大夫集」は、尊敬語の使用例はわずかであり、使用されるにしても「れ」「られ」など、「給ふ」より随分へり下ったごく軽い表現となっているのである。

次に、「右京大夫集」が最終的に成立したとされる鎌倉中期から末期に、二人の宮廷女房によって書かれた「中務内侍日記」「竹向きが記」における尊敬語使用の例を挙げる。

【中務内侍日記】

○「大夫殿（西園寺実兼。東宮大夫は、（中略）入り江の松の下に隠ろへて、琵琶を調べてをとづれ給ふ。」「いづくならむ」いだしれば、御舟さし寄せて参り給ふ。」

○「中宮大夫殿（西園寺公衡）、神楽を囁き給ひて、「蕭々たる暗き雨の窓を打つ声」と口ずさみ給ふ。」

【竹向きが記】

○「（西園寺公宗）まだ宵のほどに立ち寄り給へる、程なく鳥の声、鐘の音、こなたかなたに聞こゆ。『そら音にこそは』などおほめき給ふさまなるに……（後略）」

「中務内侍日記」の作者、藤原経子は、従三位水経の女。弘安十年、天皇践祚に伴う女官除目で掌侍に任ぜられた。「竹向きが記」の作者、日野名子は日野大納言資名の女。はじめ後伏見院に出仕、光厳天皇践祚にあたり典侍となり従三位に叙せられ、後に

権大納言西園寺公宗の正室となった。二人ながら上達部の息女であり、当人も上臈女房としてかなりの高い地位を得ている。藤原氏の末流に細々と連なり、従五位下宮内少輔という身分を得るのがやっとであった父を持つ中臈女房であった右京大夫とは相当な身分の隔たりがあったと思われる。

しかし、前掲の例文を参照すると、不思議な現象に気付く。上臈女房として、交流のあった貴族の男性たちにも一目置かれていたはずの中務内侍藤原経子、日野名子は、その作品中に登場させる彼らに対し「給ふ」という高等尊敬語を用いている一方、一介の中臈女房であった右京大夫は、摂関家や大臣などの上達部は別としても、高級貴族の子弟たち（数年後には二位、三位の地位に昇り、上達部となった人々である。）に対しては、「給ふ」という語を用いていないことはもちろん、「る」「らる」といったごく軽い尊敬語すら用いてはいない人物すら、一人ならず見うけられるほどなのである。

以上、幾つかの日記文学作品との比較を行うことで「右京大夫集」の尊敬語使用の異常なほどの少なさを検証したが、「右京大夫集」という作品は日記文学の性格を強く持つとはいえず、あくまで私家集というジャンルに分類されるものである以上、平安中期―鎌倉初期にかけて多く産出された私家集との比較も必要となる。ここでは、その中でも宮廷女房の手によるものに焦点を絞って見ていきたい。

比較材料として「私家集大成」中古Ⅱ、中世Ⅰに収録されたすべての宮廷女房の私家集を参照したが、和歌集という作品の体裁

上、詞書を持たず題のみのもの、また詞書が極めて短く、比較材料に適さない作品も多かったことをここで断りしておく。

【郁芳門院安芸集】二五番歌詞書

○「六条院に源中納言まいりたまひて、たつねられるを、出づるほどにて今立ちかへりまいらむときこえしを、出でたまひければ……」

【殷富門院大輔集】

○「一八番歌詞書「その夜、左衛門のかみ風氣とてまいり給はざりしに……」

○「一六九番歌詞書「同じ大殿、春うせ給て、秋ごろつちみかどの中納言の御もとへ」

【小侍従集】

○「一四二番歌詞書「大炊御門の右大臣かくれさせ給て」

○「一四三番歌詞書「大炊御門の少将、宮へまいりてたつねさせ給に（中略）つはねなる硯のふたにかきつけたまひし」

（以上、引用は「私家集大成 中古Ⅱ・中世Ⅰ」による。

表記は適宜私に改めた。）

紙面の都合上、ここではいくつかの例を挙げたに過ぎないが、多くの私家集において「給ふ」に類する高尊な尊敬語表現は多数の例が認められた。【殷富門院大輔集】「一六九番歌」と【小侍従集】「一四二番歌」の詞書は、いずれも上達部の死亡記事であり、本論文の第二章に引用した大宮入道内大臣実宗の死亡記事と類似しているため、ここに載せた。

内大臣という高官たる実宗の死を描く際に、右京大夫は「うせられたりし」と軽い敬語を用いているに過ぎないとは先に述べたとおりであるが、殷富門院大輔、小侍従ら女房たちは同様の場面において「うせ給て」「かくれさせ給て」という高尊な尊敬語を用いて描くことで、死亡した上達部に敬意を表しているのである。

（四）宮廷女房というものの地位

平安時代末期から鎌倉初期当時の宮廷において、建礼門院右京大夫という女性性は果たしてどういった地位を持っていたのか。尊敬表現についての考察を深める場合、その作品を著した作者当人の地位、身分の考証は必要不可欠である。「右京大夫」という女官の地位を考証する前に、まずは宮廷女房という存在がこの時代においてどのような立場を占めていたのかを見てみたい。参考として、『建春門院中納言日記』を用いる。

○「人の局より声かけてまゐる女房などはひとりもなし。下臈までも親たち添ひ、もてかしづく人ありて、出入りにつけて安らかに、局の中まで人に劣らじと好みもてなしたる限りなれば、何事の飽かぬことかはあらん。親子姉妹ならで人の局に居たる人ひとりもなし。上童、雑仕など二人あるは多かりしかど、一人なきは思いもよらず。」

見てゆくに、宮廷女房の地位は決して低いものとはいえない。他所の局から出仕する者はひとりもおらず、すべて女院に密接な関わりのある家の子女たちであり、みな独立した局を持って、仕

える童を二人以上は用いるという生活であつた。

さらに中にも細かい身分の区別が存在した。「聴色」つまり禁色の織物を着ることを勅許により許された人々と、許されない人々との区別である。禁色を許された女房の数はごく少数で、建春門院に仕える女房たちの中では一二人のみであつたという。

『女官通解』によると、上臈とは大臣、大中納言格の貴族の子女たちであり、それぞれ父の官位にちなんで大納言、中納言、左衛門督、帥、などの呼称をもつて呼ばれた。

「右京大夫」は上臈といえる身分ではなく、中臈にあたると。

○「中臈より以下は、織物を着ることあたはず。この故に、上臈に比して格下がれり。また上臈は夜の御殿、朝餉に侍し給へど、中臈以下はこのことなし。」（『女官通解』）

中臈の格に属する者は、侍臣（四、五位の殿上人）の女、諸大夫の女など。医官、神官の娘などもみなこの格にあたる。その呼称の例としては

小宰相 小督 中将 少将 左右京大夫 左右衛門佐 少納言 大輔 侍從

など、女房の呼称としては古典文学作品において最も多く見られる例である。

○「御所の引き物の内へ上臈ならで参らず、大和、三河、常陸やうの人々、申すべきことなどあれば、御縁、広廂に御簾引きかづきてぞ候ひし。」（『建春門院中納言日記』）

建春門院の御所を訪れる貴族たちへの応対の場合、相手するのは必ず上臈女房たちであり、それより下級の大和、三河、常陸

などの呼称を持つ女房たちは、貴族たちの前に出ることは許されていなかったようである。『女房官品』によると、女房の呼称において国の名を冠するのは、下臈の証であつた。大和、三河、常陸は姉妹であり、彼女たちの母は武藏と呼ばれた女性で、検非違使某の妻であつた。検非違使は別当ならば従四位以上相当の職で高級貴族の官職であるが（前掲の『古今著聞集』において藤原隆房は検非違使別当となつている）。一般の検非違使は決して高級貴族といえる官ではない。

以上の事柄を総合して考えてみるに、宮廷女房の地位は上臈、中臈、下臈の厳然とした区別があり、身分によつてかなりの待遇の差異があつたことがわかる。

それでは右京大夫という地位はどうか。呼称を見る限り、一応は国名を冠してはいない。『右京大夫』の呼称は、後見人であつた藤原俊成の官名によるのではないかという説が有力である。俊成は仁安三（一一六八）年から安元三（一一七五）年まで右京大夫であつた。

右京大夫の父、藤原伊行は従五位下宮内少輔で留まる中流貴族にすぎなかつたが、宮廷での出世よりも学者として『源氏物語』『伊勢物語』などの研究、注釈を行うことに情熱を傾けていたらしい。また伊行の出身である世尊寺家は三蹟の一人、行成を祖先とする能書家の家系であり、右京大夫もまた父の導きにより書を能くしたことを思われる。その上、彼女の母は石清水八幡宮の楽人大神基政女、琴の名手夕霧である。有力な後見を持たなかつた右京大夫が、俊成の後見を頼んでようやく中宮徳子のもとに仕え

ることを許されたのは、身分的なことは関係なく、豊かな芸術的才能、教養を買われてのことであつたと推測される。

このように、一介の中臈女房にすぎなかつた右京大夫は、貴族の子弟たちにしてみれば、一時のたわむれならばともかく、結婚などはないも寄らない存在であつた。実際、右京大夫は資盛と恋愛関係にあつたとはいえあくまでも愛人としてであり、妻として遇されることはなかつた。資盛には中納言藤原基家の姫という重々しい立場の正妻がいたのである。

資盛の兄維盛、叔父にあたる重衡は宮廷女房を妻としていたが、新大納言（維盛室、大納言藤原成親女、大納言佐（重衡室。大納言藤原邦綱女。安德天皇乳母）という呼称が示す通り、右京大夫とは格の違う、貴族の正妻となるにふさわしい上臈女房たちである。公然と資盛の妻となることができなかったというこの事実ひとつを見ても、右京大夫という女房の地位の低さが確認できる。つまりは右京大夫にとって、平家の公達、実宗、隆房ら貴族たちは、重々しい尊敬表現語を用いて飾り立てて然るべき人々であつたと見てよい。

(五)「建春門院中納言日記」と

「右京大夫集」との類似性

「右京大夫集」前、後半部ともに成立は建保年間後半かそれ以後であるという仮説を裏付けるもう一つの証拠と考えられるのが、「建春門院中納言日記」中で用いられる貴族への尊敬表現語の使用法が、「右京大夫集」でのそれと非常に類似しているとい

う事実である。

「建春門院中納言日記」は、日記作品としては珍しく、その奥書部分に成立年が明記されており、しかもその取り上げる年代、成立年ともに、「右京大夫集」に非常に近似していると思われるので、比較材料としてこれほど適した作品はない。

「建保七年三月三日書了。西面にて昼つきた、風すこし吹くに、少納言とのに読ませまいらせて、と。」

この奥書によると、建保七（一二二九）年、作者の養女となつていた少納言という女房に読み上げさせて、作者建春門院中納言は、その作品の清書を完了したという。執筆が始められたのは、建保四年ごろであり、ほぼ三年ほどかけて纏められたと推測されている。

建春門院中納言、藤原俊成女、本名健御前は保元二（一一五七）年生まれで、年齢的にも右京大夫とはほぼ同年である。自らの若き日々を日記のような形態で描き、作品を一貫する主題が亡き人への追憶の念であるという点は「右京大夫集」と共通しているが、「建春門院中納言日記」の方は女房の名寄せ、儀式の際の衣服の着用法など、後輩女房への教訓書としての側面も大部を占め、平、藤原氏の公達との応酬場面などで尊敬語が使用される例は少ない。本論文の目的は両作品の詳細な比較ではないので、ここでは尊敬語の使用実態を参照できる幾つかの例を挙げるに留めたいと思う。

○「朝夕目に見えし若かりし人どもは、あり経るままに大納言、中納言とて目の前に居並びたりしかば、まことにことは

りなりける身をとの思いなして、人々しき方は思い離れて過ぐれど……（後略）」

（『建春門院中納言日記』）

○「昔軽らかなる上人などにて見し人々、重々しき上達部にてもあるも、とぞあらまし、かくぞあらましく思ひつづけられて、ありしよりもけに心のうちはやらんかたなく悲しきこと、何にかは似ん。」（『建礼門院右京大夫集』三三二番歌詞書）

ここの『建春門院中納言日記』の記事は建仁二（一二〇二）年についてのものである。その当村上達部であったのは、藤原実宗（大納言、藤原泰通（権大納言）、藤原隆房（前中納言）らであり、作者が「朝夕目に見えし若かりし人ども」と言及するのは、この人々を指すと思つて間違ひは無いであらう。

『右京大夫集』においても、「かろらかなる」殿上人であつたころから上達部にいたるまで前半、後半を一貫してその消息が描かれる人物といへば、藤原実宗、隆房をおいてほかにはいない。しかも、この叙述の直後には、嘆くこと（あるいは父の死であらうか）があつて家に籠つていた隆房への慰問の記事、そして実宗の死亡記事が配され、ますますもつて、ここの「重々しき上達部」とは実宗、隆房を指すのだと確信を強められる。

つまり、ここでの叙述には、かつては親しく口を利いた実宗や隆房も、今では宮廷の重鎮たる上達部となつて、自分たちが軽々しく交わることなど不可能な人々となつてしまつたのだ、という二人の女性の意識がうかがわれる。

しかし、繰返し述べてきた『右京大夫集』は言うまでもなく、『建春門院中納言日記』においても、ここでは「上達部」たる実

宗、隆房らに対し、尊敬語が使われてはいない。

もうひとりと、『建春門院中納言日記』『右京大夫集』両作品に共通して登場する人物を例に挙げる。中宮徳子の叔父にあたる平親宗である。

『建春門院中納言日記』

「〔前略〕萱の御所に火出で来にけり。（中略）〔女院に〕御衣をたてまつるほどに、括り高く上げたる男の、あさましく騒ぎて「御前は、やや。」と問ふを見れば、親宗の弁なり。ただの折は「御所」とのみこそ申すに、騒ぎける程も著し。」

『建礼門院右京大夫集』

「親宗の中納言うせてのち、昔も近く見し人にてあはれなれば、親長（親宗の二男）のもとへ、九月のつくるころ申しやる。（後略）」

親宗は兄時忠と違い、平家一門とは一線を画して後白河院側近として活躍し、従二位中納言の地位に昇つている。平家没落にはそれほど関わりなく、上達部として宮廷において高い地位を占めていたことは確かであらう。

上達部として世に遇されていた人々に対して尊敬表現語を使用しないというのは『右京大夫集』の大きな特徴であると述べてきた。建保七（一二二九）年に本人の手でまとめられ、おそらく一二三〇年代始めごろに弟の定家によつて遺文が付け加えられて完成したとみられる『建春門院中納言日記』においても同様の現象がみられるというこの事実により、『右京大夫集』もまた一二三〇年前後、つまり建保年間後半からそれ以降の時期に、前半、後

半ともにほぼ時を同じくして成立したといえるのではないか。少なくとも、前半部が文治四、五年には成立していたとする説は否定してよいのではないかと思う。

(六) 『右京大夫集』の執筆意図

右京大夫の、自らの作品に対する執筆態度は、作品中に繰返し記される。

「ただあはれにもかなしくも何となく忘れがたくおぼゆることどもの、ある折々ふと心におぼえしを、思い出らるるままに我が目ひとつに見んとて書きおくなり。」 (序)

「返々憂きよりほかの思い出なき身ながら、年はつもりていたづらに明かしくらすほどに、思い出らるる事どもを少しづつ書きつけたるなり。おのづから人の『さることや』など言ふには、いたく思ふままのことかはゆくもおぼえて、少々ぞ書きて見せし。これはただ、我が目ひとつに見んとて書きつけたるを……(後略)」 (三五七番歌詞書)

両方に共通する最も強い作者の思念は「我が目ひとつに見ん」の一語に集約されているであろう。しかし、「我が目ひとつに見ん」とは、作者右京大夫の本心であろうか。

「作者は『我が目ひとつに見んとて』書いたのであることを強調している。しかしながら、このようにして整えられたこの集は、もはや自身のためのひそかな営為であるにとどまらず、明らかに表現への意欲を持ち、他人によって読まれることを意識した文学作品として成立しているのである。」

『建礼門院右京大夫集・平家公達草稿紙』(一九七八年 岩波文庫)の解説に、久保田淳氏はこのように述べられる。

また、三五七番歌詞書によると、周囲の人々に問われた時には、きまり悪く思いつつも少々は書いたものを見せていたのだという。作者の半生を描き出すという目的に沿って、かなり意図的と思われるきちんとした構成を持つこの作品は、「我が目ひとつに見んとて」書き記したものと考える。

「結局、この集全体の構成は周到に考えられた結果の所産であつて、そのようなことが可能であつたのは、悲痛な経験からかなり時間が経過した頃ではなかつたかと想像されるのである。その時期を具体的に知ることはできないが、あるいは後鳥羽院政の終わり近い頃でもあろうか。」

同前の解説の中で久保田氏が述べられているこの説に、私も同感である。本論文においてその論拠としたのが、『右京大夫集』中の尊敬語表現の問題であつた。天皇、中宮などを別とした他の登場人物たちへの異様なほどの敬意の軽さ。その中でも特に、治承寿永の戦乱ののちまで長く生き、重々しい身分の上達部となつた藤原実宗、隆房に対する叙述には、彼らを遠い思い出の中の人物として客観化して描く、冷静な視点が感じられるのである。

以上の検証により、『建礼門院右京大夫集』の成立過程については、上下巻ともに、早くとも実宗の没年である建暦二(一二二二)年より後、おそらくは建保年間(一二二二—一二二八)以降の、右京大夫と同時代を生きた人々がほとんどすべて亡き者となつた後のことであつたと考える。その時点に至つてようやく重々しい

尊敬表現を用いる必要性もなくなつたのであろう。尊敬語という足かせから解き放たれ、右京大夫は初めて平家の人々を、そして実宗や隆房をも、自らの構築する歌物語の中の登場人物のように、第三者的な視点で見つめ直すことができるようになったのではないだろうか。

注1) 富山房百科文庫右京大夫集(昭和十四年 富山房)・中古三女歌人集「建礼門院右京大夫集評釈」(昭和二十三年 朝日新聞社)

(2) 右京大夫・小侍従「建礼門院右京大夫集評釈」(国文学) 第二巻

第八号(第三巻第一号(昭和三十一年八月・三十一年一月))

(3) 「評注建礼門院右京大夫集全釈」(昭和四十九年九月 武蔵野書院)

(4) 「建礼門院右京大夫集考」上下両巻の間における欄筆の想定をめ

ぐって(「言語と文芸」第五巻第五号 昭和三十八年九月)
(5) 「建礼門院右京大夫集構想論のための覚書(一)」第十四番以下四〇首の題詠歌の配置の意図をめぐって(「語文」第一五号 昭和三十八年六月)

(6) 清原元輔(清少納言父)・従五位下。河内守、周防守などの国司を歴任。後撰集時代の和歌所の寄人であり、漢学、国学の学者であった。

藤原伊行(右京大夫父)・従五位上、宮内少輔。世尊寺家という能書家の家柄にとどまらず、源氏物語、伊勢物語の注釈なども行つた国文学者。

(7) 「女官通解」浅井虎夫著(一九〇六年 五車楼による発行を改訂し、一九八五年 講談社学術文庫に再録)

新刊紹介

日下力著

『「平家物語」誕生の時代』

(かわさき市民アカデミー講座

ブックレット18)

「かわさき市民アカデミー」において日下氏が担当された講座の一部に、加筆修正を施した一冊。前半部においては「保元物語」「平治物語」「平家物語」「承久記」の

成立時期を検証し、後半部では「平家物語」の成立と当時の状況との関係に迫っている。

前書きに「『平家物語の誕生』(岩波書店、二〇〇一年刊)のエッセンスの要約とも言えそうな内容」とあるが、単なる要約を越えて、本書にはテープから起こしたもののだからこそその魅力がある。「軍記物語は平和の産物」とする著者の言葉に、また別の形で触れることのできる貴重な機会にな

ることだろう。

講座中に配布した資料も収録されており、非常に読みやすくなっている。専門分野に関わらず、そして研究者に限らず、多くの方にお勧めしたい。そしてこの書から学んだことが、戦争と平和について改めて考える機会となり、今の時代へと生かされることを願う。

(二〇〇三年九月 シーエーピー出版 A5判 八一頁 六五〇円) [村田陽子]